慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	俊才教育に就て
Sub Title	
Author	稲垣, 末松
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.2 (1909. 3) ,p.189(55)- 201(67)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090301-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

俊才教育に就て

稲垣末松

一、序論

教育といふ作用も、漸次研究が進むに連れて分岐し、詳細なる點に着目するやうになつて來た。そこで教育の客體たる被教育者の如き、通常三種類に區別せらるゝやうになつた。それは低能者、通常者、殊能者卽ち俊才である。此中の低能者の如きは、從來の實地家には固より承知せられてはあつたが、それが事々しく甄別し出されて、或はそれが原因を究め、或はそれが教育法を特に工夫するやうになつたのは、最近三十年以來の事である。獨逸では、かゝる低能者の爲めに現今特殊の學校が百七十校も設けられありて、それに於て教育の惠みに浴しつゝあるものは一萬二千人あるといふ事である。

而もかくの如き缺陷ある被教育者を特に苦心して啓發するの動機は孰れにあるかといふに、それは大略二つに歸着するのである。一つは身體又は精神が不完全

なるが爲めに、人間たるの靈能を幾分なりとも發達せしめずに終らしむるといふ事は、可愛相である、氣の毒であるといふ、謂ゆる人道彝倫の點より出でたのであつて、他の一つは、此等の不完全者と雖も、均しく社會に生息し、其粟を食みつゝあるものである。さすれば之をして可能的發達を遂げしめ、幾分なりとも生産力を取得せしむるは甚だ必要であるといふ、謂ゆる社會政策の上より出でたのである。其孰れの動機に出づるにもせよ、吾人は之を一の喜ばしき現象と認めて、其隆運を祈らねばならぬ。

扨普通平均以下に位する低能者に對する措置は此の如くあるとして、其平均以上に位する所の俊才に至りては如何に取扱ふべきか。是は今茲に攻究せんとする主題たるのである。

一體是迄日本の教育界などで唱へられて居た所に據ると、教育の中でも、其中等以上の種類のものは、本來社會の中流以上に位して、それを受くるに足るべき資力を有するものゝみの受くべきものであつて、其資力のないものは、當然之を受くべき權利のないものである。それ故に彼等は指を咬へて引込み居るべしといふやうに言はれて居つた。是は一寸聽くと尤もらしい議論であつて、世の識者と稱せらるゝものゝ中にも、之に贊するものは少くなかつた。所が近時の如き列國競爭の激しい世になつては、かゝる無責任なる放言は漸次に跡を絶つやうになり、恰も其反對が唱へらるゝやうになつた。曰く、幼少者の中でも、其衆群に卓越する所の俊才なるものは、是は當該國家の一種の國寶である。凡ての發明發見、其他社會の福祉を增進する所の企畫は一に彼等の頭腦に待つのである。從つて彼等は出來得る丈手を盡して其稟賦を發展せしめらるゝ所がなければならぬ。若し又其學資金とか修學の時日とかゞないならば、社會は工夫してこれを供給しやらねばならぬと。

此種の提唱は、先づ歐洲中でも佛國に於て起り、次に獨逸に其反響を及ぼし、其國人の中には、此俊才に對して特殊の學校を設立すべしと唱へ、其學校の組織、經費、教課目等に就きて草案すらをも構成して世に問ふたものがある。余は今此等の趣旨の大要を茲に紹介せんとするものであるが、それをなす前に、先づ俊才とは如何なるものであるかとの事に關し、二三の說述をなさう。

獨逸「ハルレ」大學の哲學教授「エビングハウス」氏曰く、俊才とは綜合的才能に長じたものゝ謂であると。詳しくいへば、常人に十分熟知せられある所の材料をば、嚴然本源的方法に於て一の新奇なる形態に構成する者の謂であると。されど此解釋は多少不十分なる所あるを免れない。何となれば、氏がいふが如くに、綜合的才能なるものは俊才の重要なる本質をなすには相違ないが、凡て綜合的才能を働かす前には、先づ分解的才能を働かすを要するものである。從つて又此種の才能をも重んじ、かくて兩者を對立せしめぬばならぬ。或は辯解するものもあらう。綜合的才能といへば既に分解的才能の活動は其中に含蓄せられてある。從つて特にそれを擧示する必要はないと。されどかゝる辯解は認容する事は出來ない。何となれば分解的才能と綜合的才能とは、世に分離して存在し得るのであつて、例へば其分解に長けたものは謂ゆる批評家となり、個々の部分の研究を進むるやうになり、而して其綜合に長けたものは、大なる思想家となるといふが如き有樣であるからである。かゝるが故に、吾人は俊才なるものを以て分解綜合の兩才能を兼有したるものと認め、而して其兼有の程度にして若しも非常に高ければ之を天才と稱し、それより低ければ狹義の俊才といふのである。釋迦、孔子、基督、ゾロアスター等は前者に屬し、而して學藝の沿革史上などに芳名を遺したものは概して後者に屬するのである。

二、俊才に對して特殊の學校を設立すべき二個の理由

通常の學校教室内で以て教師が受持學科の進度を定めるには何を標準とするかといふに、概して中等の頭腦を有する者を以てするのである。其中でも多くは其最下に位するものを標準とするのである。此の如きが故に、多數の集合より成る學級教授に於ては、優等のものは概して疎外せられて居るのである。而もかく疎外せらるゝの極は少からざる損害を蒙むりつゝあるのである。

其損害は之を別つて二種とす。一つは知力上のそれであつて、一つは品性上のそれである。知力上の損害とは如何なる事かといふに、今いふが如く、教師は常に中等の生徒を相手として働いて居るが故に、其進度は遲々として居るが、若しも之を優等の生徒のみを相手とすると假定したなら、其速力は二倍になる事が出來るといふ事である。之は實地經驗家の敢て否認しない所である。從つて今日の我國

の制度でいへば、彼等優等生は、中學校をば二年半、高等學校をば一年半位で卒業し得るのである。果してかくありとすれば、人材の養成上今日の學級組織は幾多の不經濟を與へつゝあるというて差支ない。但し右修業年限を半分にしたが爲めに、或は早熟を來すとか、或は精神の過勞を生ぜしむとかの問題は之を別問題としやう。

第二の品性上の損害とは、優等生は上述の如き狀態なるの結果として、毎日やさしくてたるさに堪へざるが故に、充分なる勤勉努力をなさぬといふ事である。凡そ人間の精神修養の上に於て、其作業の何たるに拘はらず、それに全力を竭盡するといふ習慣を積む程有効にして且必要なる事はない。是は人間の幼少なる時に於て學校で課業を受くると同時に訓練されねばならない必要性格である。然るに優等生は今日の所此貴重なる性格の訓練を受けない。有體にいへば、現在の如き學級教授で以て尤も多くの裨益を受けつゝあるものは中等以下に位するものである。彼等は常に教師に相手にせられ、監督せられ、而して其課業の程度は常に全力の傾性を要するが如きものであるが故に、其意志はおのづと修練せられ、道德的人格は不識の間に鍛冶せらるゝのである。世に學校を卒業して實際生活に立つに際り、在學時代の中等生は競爭場裡の優勝者となり、而して其優等生は空しく駑馬と群をなして碌々聞こゆるなきが如き事あるも、其一原因は如上の關係に基くやも知るべからざるのである。

詮じ詰むる所、衆群を超越する所の俊才をなして學級教授の中に於て凡庸衆と伍をなし、わたら貴重の少壯時代を勤勉努力の習慣を得る事なしに消過せしむるは、是實に該俊才の個人的不幸たるのみならず、更に當該國家の不幸である。一國民の安寧幸福なるものは、俊才偉器の作業に負ふ所大なるは固よりの事であつて、其俊才偉器の作業の良否は其幼時の教育に大關係あるはいふ迄もない事である。而もそれが教育を良好ならしむるに就ては特殊の學校の設立をなさねばならないのは自明の理である。

三、俊才は打棄て置くも自然に發達すとの辯解の誤れる所以

かの「スピノザ」や「カント」は幼時極めて不完全な教育を受けたにも拘はらず、彼れが如き大哲學者となり、「ルーテル」は乏しき僧侶教育を受けたのみで新教の開祖とな

り、又「ロヨラ」は武器製造の職工の身でありながら遂に天主教團體の創說者となつた。此等の世にありふれた事實は遂に一種の教育不要說を出すやうに至らしめた。其主張に據れば、天才や俊才なるものは打棄て置くも自然に發達す。從つて社會はそれ等が教育を受けやうが受けまいが何等の損失する所はない。一體教育が等閑に附せられて居たが爲めに、それ〴〵の發達をなす能はざるが如き意氣地のないものは、是衆群に超越して居るものではない。或は又其心力はよし非凡なるにもせよ、其氣力がそれに伴はないのである。凡そ心力といふものはそれが如何に高尙であるにもせよ、若し之を實行するの氣力が缺けて居たなら、そは何等の發展をなすものではない。而も其氣力を生ぜしむる者は何ぞといふに、そは實に困苦である。缺乏である。困苦缺乏是は果して俊才たるや否やの試金石たるのであつて、それに抗抵し得たものこそ俊才である、天才である。從つて俊才天才に對する教育なるものは、どうでもよく、又それが與ふる效果とても僅少であると。されどかゝる議論の中には、二つの缺點が存在して居るのである。一つは、教育や環境の效果を輕視する事であつて、一つは、俊才なるものゝ心理的分解並にそれよ

り發生する着眼が不十分であるのである。此第一の缺點の因つて出でたる所は、大凡次の重要なる事實を知らないのに坐するのである。人間の精神といふものは幾多の稟性の集合體であつて、此集合體たるや、外界より及ぼす勢力に對し何等かの反動をなす事によりて始めて發達をなすものである。かゝるが故に、此發達を全うせしめやうと欲するならば、兩者の共存を待たねばならないのである。之をして孰れか一に歸着せしめやうとするのは、恰も世界歷史の事蹟を以て、單に各個の英雄豪傑のみの致す所となすか、又は當時の時代思想のみの致す所となすのに同じ。眞實の所、各人の性格爲人なるものは、其天稟のみの致す所でもなければ、又其教育のみの致す所でもない。かの物理學を規則正しく學んだものは、力の平行方形に於けるが如く、兩力の一のみを認めない。之に反し、時には甲力が優勢、時には乙力が優勢といふ工合に兩力の對立並存を認むるのである。之と同樣に、教育や環境の勢力といふものも、亦天稟と同じく重視されねばならない。「モルトケ」將軍にして若しも平和の時代に生れ、「ビスマルク」にして若しも武將になつたなら、果して彼れが如くなり得しや否、頗ぶる疑はしいのである。

次に第二の缺點を指摘せんが、上述したる如く、俊才とは分解綜合の兩力を併有し居るものである。若しも果して此の如くありとすれば、其分解すべき材料、其綜合すべき元素を供給するは必要の事ではあるまいか。而も之を供給するのは教育の力である。之をしも自然に、放任して置いて自ら收得せしめよといふのは聊か酷に失するのである。

此等の理由であるが故に、俊才に對しても亦教育を施し、それをして特に發展の機會を得、材料を受納せしむるは必要の事である。俊才に對する教育不要說の如きは、心理的根據を缺く所の淺白なる皮相論、若くは社會國家の大勢に着眼せざる偏局なる管見である。而して論者がいふが如く、之をして困苦缺乏に逢はしむるが如きは、是單に多數の教育方便中の一方便たるに過ぎないのである。

三、俊才に對する特殊學校の設立に關する具體的方案

俊才に對する特殊の學校は如何なる種類のものであるべきかといふに、それは中學校、高等學校である。其所在地は先づ大都會たるものであつて、其都會の行政當局者は之が創立に任ずべきである。次に此俊才を甄別するには何歳頃に於てすべきかといふに、それは可能的早くといふ外に答へやうはない。されど人間の天賦の能力なるものは餘り早く發現するものではなく、又各年齢にそれ〴〵分配せられて發達する者である。且つや又幼時の神童は異日の鈍童となる事も少くない。此の如きが故に、之を甄別するに尤も適當なるは、獨逸「ギムナジウム」の「三級下」(ウンターシェル)組(シャ)即ち十四歳頃である。而して將來若しも此種の學校にして增加發達するやうになれば、此俊才を甄別すべき標準方法等は更に詳密に規定されねばならぬ。次にそれを一學級に集むるには凡そ何人程なるべきかといふに、それは二十人を以て適度とす。而して之が薫陶の任に當る所の校長及び教員は、孰れも根本的の科學的の修養を積み、確固たる教育的訓鍊を受け、且つ相當の實地經驗を有するものでなければならぬ。その受持時間は、校長にありては一週六時間以下、上級教諭は十二時間、下級教諭は十五時間以下とす。尙此外に、心理的教育的訓練を受けたる神經病專門の醫師一名を常置し、かくて生徒の入學の際は勿論の事、平日に於ても常に教室を巡視して異常に備へ、特に些少なりとも過勞の徵候ありたる時は、直に適

應の措置をなさしむるを要す。かゝる組織の下に立つ一特殊學校の經常費は、一年に十萬「マルク」乃至十二萬「マルク」以下とす。

此特殊學校に於ては其れ〳〵知力の形式的陶冶並に實質的陶冶を施すべきは勿論なりと雖も、特に其德育に關しては一層力を盡す所あるを要す。蓋し特殊の心力能力を有する俊才天才にして、一朝軌道を失し、例へば自利の迷路に陷るか、又は其他の不德に陷るが如き事あるに於ては、其影響する所實に鮮少でないからである。

五、結論

上來敍述し來りたる特殊學校の敎育目的を更に終りに臨んで反復すれば、こは、一方に於ては、勤勉努力の習慣を得せしめ、他方に於ては其本然の賦性を可能的有效に發達せしめやうとするのである。現今各國民の經濟上の狀態は、其國內に於けるあらゆる俊才を收容してそれが滿全なる發達を計り得る如く然く良好なる能はずとはいへ、吾人は理想として、社會の最下層の中よりしても之を發見し、而して祖國の爲、全人類社會の爲に之を育成すべき事を主張するのである。見渡す所各國互に對峙競爭これ違あらざるが如き有樣であるが、其最良の敎育を施したる俊才を有する所の國民は最良の進步をなすものといはねばならぬ。其故は、如何なる國民中にもそれ〳〵の俊才天才は存するに相違なく、其異なる所は唯それが敎育の如何にあるからである。少くとも文明國民に於てはかゝる狀勢たるのである。思ふに一個の俊才學校に十萬「マルク」を投ずるは敢て安價ならずとはいへ、若しも之が爲めに一人の「ゲーテ」の如きものを產出し得し、ならば、此巨額は償はれて餘りあるのである。吾人は既に低能者に對しては開發誘導到らざる所はない。而も低能者と俊才とは孰れか先なるべきかといふに、國運の維持且つ發展上後者なりと答へねばならぬ。吾人は玆に斷言せんが、將來の列國競爭場裡の優勝者とならしむる所の原動力は、實に此俊才の敎育策の生む所であつて、而も又、敎育の問題中、此俊才敎育のそれ程、世の注意を惹き、且つ惹かざるべからざるものは他にないのであると。世の先覺者たるべきもの須らく玆に着眼すべきである。